

浸水区域の活動におけるヒヤリハット事例集

事故概要				
活動区分	どのようなことが起きたのか (起きそうになったのか)	事例の名称	事例の中心的要素	事例の原因・理由
陸上	転倒	水難救助活動中に、土手の溝に足をとられ負傷した事例	夜間で視界が悪く草が生い茂っていた為に、周囲の状況を予測できなかった。	夜間の現場活動における事故予見能力不足によるもの。
陸上	転倒	水没した道路の陥没に足を取られた事例	被災地を歩行中、濁った水により陥没箇所を確認できず膝上まで陥没箇所により足をとられた。	足元を確認しながら進んだが、確認が不十分であった。道路は至る所が陥没したり損壊しており、そのうえに泥水が溜まり、まったく予想しない場所に穴が空いていたりする。また、それらの窪みに汚泥が溜まり、足が埋まった場合に、足を引き抜くのに力が必要であった。何気ない市街地でも単独の行動は、極力避けるべきと感じた。
陸上	墜落・転落	思わぬ水路（緊急消防援助隊の派遣による活動）に転落しそうになった事例	家屋等のがれきを、少しずつ除去していたところ、水深がある広い水路に転落しそうになった。	地面の活動が全く見えない活動であったため、徐々にがれきを取り除いていく作業工程で注意力が散漫になっていた。
陸上	墜落・転落	大雨により増水した河川付近で作業中、急に足元が崩壊し河川に転落しそうになった事例	河川氾濫防止のために積んであった土嚢を再度積み直そうと作業していた際、足元の状況を過信し作業を続けていたところ河川に転落しそうになった。	現場の状況把握、危険予知を怠ったこと。
陸上	墜落・転落	河川警戒時に右岸川表法面が崩壊し、転落しそうになった事例	消防隊は、大雨により河川の右岸川表法面が崩壊した情報を得て警戒出動した。既に堤防上では業者により重機を使用し1トン土嚢を設定中であった。隊長を含む3人で現状把握を行いながら重機作業を監視していたところ、急に隊長の足元付近から崩落（幅1m×長さ2m）が始まり、危うく流されそうになった。	安全管理の欠如と危険予知不足。 業者作業員が重機により1トン土嚢を積上げており、その作業に気をとられ足元の安全管理を怠ったもの。
陸上	おぼれ	波浪時の海岸道路における作業中、引き波にさらわれそうになった事例	海岸道路沿いにある商店から「店内に波が入りそうなので入口に土嚢を積んで欲しい」との要請により作業中、著しい高波が海岸道路を超え、作業中の隊員及び車両に波が到達した。その引き波により車両が30cmほど動き、荷台に退避した隊員が波にさらわれそうになった。	波の監視が不十分であった。
陸上	転倒、おぼれ	水難救助中、ロープを確保する陸上隊員が入水してしまい流される危険性があった事例	河川で流されている要救助者を救出するため、救出に向かった隊員がロープにて陸上から確保している際、ロープの長さが足りなくなり河川に入水してしまい流されそうになった。	河川に流れがあった。確保ロープが短かった。
陸上	転倒、おぼれ	救助活動中、河川に引きずりこまれそうになった事例	河川で複数人が流されており、スローバックにて救出。1名の隊員が確保しているスローバックに要救助者が複数名掴まったことにより、確保者が引きずられそうになった。	確保者のバックアップ体制が必要であった。
陸上	踏み抜き	津波による被災地を探索活動中、釘が防火靴外果部に引っ掛かり受傷しそうになった事例	津波による被災地において探索活動中、破壊された家屋の構造材からむき出しになった釘が防火靴外果部に引っ掛かり、足を受傷しそうになったもの。	津波によって破壊された家屋の構造材が山積みになっており、足元が不安定であるとともに、むき出しになった釘をすべて把握するのが困難であった。
ボート	おぼれ	河川における流水救助訓練において、ラフトボートが転覆した事例	河川の中州から右岸ヘンションダイオゴナル（対角線展張）を設定し、ラフトボートを結着して3名が乗船して流れに逆らって進水させた際、カレンベクトル（本流）の流水抵抗でボートが転覆し、隊員2名が川へ転落した。	河川知識の欠如及び渡河方法選定ミス。
ボート	おぼれ	探索活動中、ボートが沖に流されてしまい身動きが取れなくなった事例	津波被害の現場で探索活動中、ボートが沖に出たが強風で流されてしまい身動きがとれなくなった。津波警報が発令されたが安全な場所に避難することができなかった。実際には津波はなく大事には至らなかった。	船外機のないボートで沖に出たこと。天候を考慮しなかったため。

ボート	おぼれ	一級河川氾濫による水難救助活動中に救助隊のボートが転覆した事例	連日の台風の影響により、1級河川が氾濫し町の一部が濁流に飲み込まれ、車等に残された要救助者を救出活動中に、船外機付ボートでの救出を試みたところ、濁流により削られた場所へボートが流され、約3mの高さから落下後、転覆し救助隊6名が流されるも怪我なく自力にて、浅瀬に上がる。	普段は、国道で川が流れているところではなく、朝方であり薄暗く周囲の状況や濁流の流れや、速さの把握するのが難しく、さらには、濁流による地形の変化等の予測が出来ていなかったため。
入水	転倒	現場に向かう際、冠水で道路の境が分からず、転倒しそうになった事例	冠水した道路を、徒歩により現場まで向かわなくてはならず、また、水深が膝上を超え、流速も早い状態で道路面が視認できなかったため、流木、岩等の障害物のほか側溝等に足を取られて転倒する危険があった。	悪条件下での現場活動、流水による視界不良
入水	転倒	道路冠水時の歩行移動中に側溝に足がはまった事例	足元が確認できない冠水道路で側溝に足がはまった。	冠水時、路面が確認できないにも関わらず、無警戒に歩行したため。
入水	転倒	豪雨により国道●●●号線ガード下地下道が冠水した。車両が水没していたが水深が浅くなったため、徒歩で検索中に転倒した事例	水深が60センチメートルで水が濁っていたにもかかわらず、道路の状況を確認せずに濁った水の中へ進入し転倒した。	懐中電灯は使用していたが、足元を確認する器具又は細心の注意を払いながら濁った水の中を歩かなかつた。道路には何もないうらと思っていたのに段差があった。道路のマンホールが外れていれば、落下した可能性があった。
入水	転倒	車両誘導時に転倒しそうになった事例	大雨により、側溝に雨水が溢れ返った状態で、緊急車両の誘導を行っていた際、左足が側溝内にはまり、転倒しそうになった。	集中豪雨により側溝に雨水が溢れかえった状態で、車両の誘導を行ったため、側溝に気付くのが遅れたのが原因である。
入水	転倒	豪雨により、道路が冠水し、路上にいた市民を安全な場所へ誘導する際、転倒しそうになった事例。	腰ほどの高さまで冠水しており、縁石等の障害物が視認できず、何度かつまずき転倒しそうになった。川のように流れがあり、転倒していたら流されていたかもしれない。	出勤時は足首くらいまでの高さしか冠水しておらず、ライフジャケットを装着せず防火衣で出勤してしまった。危険要素は分かっていたが、初めて体験する災害で焦りがあったことが中心的要素と考えられる。
入水	転倒	浸水した住宅街での活動中、水没した側溝に足を取られ転倒した事例	住宅街の道路が、腰の高さ(約1m)まで浸水しており、道路と側溝の境目がわからず側溝に足を取られ転倒した。	事前に浸水していない場所を確認し、住宅街の道路状況等を把握しておらず、側溝がある事を周知していなかった。
入水	転倒	水害活動中(冠水)に側溝に転倒した事例	冠水により側溝が水没しており、活動中側溝に気が付かず足を踏み外し転倒した。	活動のみに集中していた。作業前の周囲の安全管理を怠った。
入水	転倒	豪雨により冠水した道路の側溝で転倒した事例	豪雨で道路が冠水、道路端の側溝に気づかず両手に土嚢を持った状態で側溝に足を突っ込み水流により転倒したものの。	道路が冠水し側溝の存在に気が付かなかった。[道路脇には側溝がつきもの]という事を考えずに道路端を歩いてしまった。
入水	転倒	冠水した国道上で立ち往生した車両内に取り残された要救助者を救出する際、転倒しそうになった事例	救助に向かう濁流の中で足元をすくわれ、転倒しそうになった。	水流の強さと、流れの変化を把握できていなかった。
入水	転倒	河川の氾濫による道路冠水時、取り残された車両から要救助者を救出する際、転倒しそうになった事例	消防車両と要救助者のいる車両間に確保ロープを設定後、自己確保をとり救出を開始するが、冠水した中央付近のみ水の流れが速く、隊員が転倒しそうになった。	要救助者のいる車両へ進入した経路と確保ロープ設定後の要救助者を救出した経路が違ったため、水流の流れの把握ができていなかった。
入水	墜落・転落	冠水した現場での活動中、排水路に転落した事例	冠水した薄暗い現場での活動中、排水路に転落した。一時的に流されたが排水路のふた(鉄板)につかまり、激流の中、同僚に救出された。	大雨等で冠水した現場では、道路、排水溝、河川等の境界が分からないことから、隊員相互の共通認識を持ち、とび口等で進路の確認を行うとともに、流れの方向、強さ等を共有することが重要であった。また、救命胴衣の着装は必須である。さらに、現場全体を俯瞰する安全管理も徹底しなければならない。

入水	墜落・転落	大雨による水害現場での救助隊員が水没した事例	大雨による増水で孤立した住宅地の住民をゴムボートで救助するため、ボート補助に向かう途中、道路際の用水路に足を踏み外し水没した。	濁水による視界の悪さ。行動の意志決定に問題があった。
入水	墜落・転落	冠水した現場で隊員が水没した事例	台風による高潮のため、家屋への浸水被害の調査及び警戒・広報活動を実施中であった。道路は冠水しており、水位は膝下ぐらいまであり、そんな中、建物集落の間を地元消防団員と共に活動中、突然側溝に落ち、胸の位置まで浸かったが、流れもなかったため暗きよに流されることもなく、けが等もなかった。	不慣れた場所での活動、夜間で、膝まで冠水していたため足元が見えない状況での確認不足。
入水	墜落・転落	水難救助現場において側溝に転落した事例	増水したアンダーパスでの水難救助事案で、道路の側溝が増水により確認出来なくなっていたところ、気が付かず側溝内に転落した。	思い込みとあせり。ライフジャケットの未装着。
入水	墜落・転落	水難救助現場において側溝に転落した事例	増水したアンダーパスでの水難救助事案で、道路の側溝が増水により確認出来なくなっていたところ、気が付かず側溝内に転落した。	思い込みとあせり。ライフジャケットの未装着。
入水	墜落・転落	大雨により冠水道路巡視中、道路上のマンホールの蓋が開いているのに気付かず転落した事例	大雨の中、冠水道路を徒歩で2人の隊員が巡視中、道路上のマンホールの蓋が水位等により開いて片足が転落し、ライフジャケットは未着用であった。	河川の増水や水難事故による活動では、ライフジャケットの着用は当然の装備として準備するが、道路冠水状況の巡視活動であった為、通常の災害活動用装備（ヘルメット、雨合羽、銀長靴）により冠水箇所の巡視を実施したことによる油断。
入水	墜落・転落	車両誘導時に排水溝に転落した事例	暴風警戒広報時、道路冠水のため車両が前に進めなくなったので、車両から降り後進させて、誘導しようとした際、道路左側の蓋の無い排水溝に転落した。	道路が冠水している状態で水も濁っており、道路と排水溝の蓋の有無について、視認できなかった。
入水	墜落・転落	冠水した現場での活動中、排水路に転落した事例	冠水した薄暗い現場での活動中、排水路に転落した。一時的に流されたが排水路のふた（鉄板）につかまり、激流の中、同僚に救出された。	大雨等で冠水した現場では、道路、排水溝、河川等の境界が分からないことから、隊員相互の共通認識を持ち、とび口等で進路の確認を行うとともに、流れの方向、強さ等を共有することが重要であった。また、救命胴衣の装着は必須である。さらに、現場全体を俯瞰する安全管理も徹底しなければならない。
入水	おぼれ	冠水道路で歩行中、側溝に気付かず水中に転落した事例	大雨により水路が増水し道路が冠水していたが、路面を確認せずに歩行した為側溝に転落した。	路面の確認不足
入水	おぼれ	冠水した用水路に転落しそうな事例	雨による用水路の冠水の為足元が確認できず、用水路に落ちそうになった。	注意・確認が十分でなかったことと、大丈夫であろうという思い込み。
入水	おぼれ	大雨による増水時、水路に転落し流されそうになった事例	台風の大雨により道路が冠水し、水路と道路の境目がわからず、水路に転落しながら流されそうになった。	現場付近の地理・地形の認識不足。活動経験の不足。不注意。
入水	おぼれ	冠水した道路を横断中、流されそうになった事例	住宅が浸水する恐れが大であった為に、時間帯も考慮し住民に危険を知らせることが重要と考え単独で防護柵につかまりながら冠水道路を横断し、流されそうになった。（水深1m強のうえ流れも速かったため身の危険を感じる状況であった。）	応援隊の到着を待たず単独行動を行ったこと。
入水	おぼれ	増水した河川での救助活動で溺れそうになった事例	要救助者を救出中、急流に巻き込まれ溺れそうになったもの。	急流救出の知識不足、流水の勢いや流れの方向の判断ミス。

入水	おぼれ	河川における水難救助現場でバックウォッシュに巻き込まれた事例	河川のえん堤部分に水没していると思われる要救助者救出のため、流向・流速を確実に把握しないまま入水し、河川の中央の急流に引き寄せられ、えん堤の落差部分のバックウォッシュに巻き込まれたが、脱出・浮上することができた。	河川知識の欠如。 進入、救出方法の選定ミス。
入水	おぼれ	河川での水難捜索現場において、入水したところ流されそうになった事例	現場は河口付近で、救助ボートから流速を確認し入水したが、考えていた以上に流速が速く、救助ボートへ戻れなくなった。	現場状況の把握
入水	おぼれ	水難事故出動時に救出に向かった隊員が溺れそうになった事例	生存している溺者を目前にし、早期の救出を要する事案に際し、水中進入隊員の安全管理が万全でなかった。	資器材準備や救出方法の思案をする、いとまが無かった。 他の警防隊との連携が不十分であった。
入水	おぼれ	水難救助現場で消防隊員が深みに足を取られた事例	水深約40～50cm程度であると認識していた河川から要救助者を引き寄せようとした際に、急激な深み(約1m)に足をとられた。 なお、夜間及び濁りのため水底を視認できない状態であった。 また、消防隊員は通常の救助出動時の服装(防火着、活動ヘルメット)であったため、深みに入ってしまった時に防火衣装着では身動きが取れなく、溺れてしまう危険があった。	現場が浅瀬であることと思込み、安易に入水してしまった。 日頃の訓練では、活動服、長編み上げ又は短靴、救命胴衣で統一しているが、事例当時は、冬期の夜間であったため気温が低く、訓練で実施している服装を怠り、防寒を優先してしまっただ。 消防隊長及び他の隊員は水難救助現場での防火衣装着が危険であることが認識不足であった。
入水	おぼれ	流速の速い水路に落水し、サイフォン内に流入しそうになった事例	水難救助活動中、上流(他消防本部管轄)で入水した要救助者をサイフォン付近で、水面監視をし移動したところ、幅約60cmの足場からバランスを崩し、水路に落水した。ライフジャケット着用と自己確保をし、自分の手が足場にかかっており、また他隊員が近くにいたため、すぐに川から上がる事が出来たので、サイフォン内に流されずにすんだ。	危険な場所であることを認識し、慎重に移動していなかったこと。水面監視という任務上、転落入水危険の無い場所から監視をすること。
入水	おぼれ	津波により浸水した住宅地域で水辺の深みにはまった事例	津波により浸水した場所を移動中、膝くらいの深さの水辺を歩いていたら、急に足の届かない深みにはまってしまった。 救命胴衣を着装していたため、岸まで2メートルほど泳いだ。	水深を膝くらいだと思いこんでため、注意せずに深みにはまってしまった。 水が濁っており深さがわからず、また水深の確認を怠ったため。
入水	おぼれ	津波により浸水した水田内を検索中、深みにはまり脱出不能になりかけた事例	津波により浸水した水田内で要救助者を検索していたところ、急激に水深が深くなっている箇所気付かず隊員が進入したため、脱出不能になりかけた。	地形上、現場がそこまで深くないと判断してしまったため。
入水	おぼれ	津波震災地区で付近一帯の人命検索中、用水堀に体ごと落下した事例	津波震災地区で付近一帯の人命検索中、路上に津波による海水が膝位まであり、道路及び用水堀の区別がつかない状況で前進していたところ、急に体ごと用水堀に落下した。 首まで水につかったが、とっさに用水堀の淵の部分をつかんだため、全身までは落下しなかった。	付近一帯の状況の確認不足及び隊員間の連携不足、個人装備品の選定ミス。
入水	おぼれ	捜索実施中に水没した事例	水没している学校のグラウンドを検索中、車を発見し、とび口で深さを測って実施していたが、車の周辺が深くなっており水没したものの。	車の周辺に到着し、同じ深さであろうという認識が原因と考える。
入水	おぼれ	冠水道路で溺れそうになった事例	現場付近の河川が氾濫し、幅15m(深さ70cm)の冠水道路が川のような状態になり、安全確保のためのロープに安全帯で確保しながら渡ろうとしたところ、急流に対応できなくなり溺れそうになった。	体力的に慢心していた。 防火衣(セパレート式)での活動であったため、急流の抵抗に耐えられなかった。(消防団は両具のみの軽装備であったため、水の抵抗が少なく渡ることができた。)
入水	おぼれ	河川に車両が転落した水難救助事案において、救助者が安全装備を着装せず救助活動を行った事例	消防隊到着時に要救助者は、自力で車外へ脱出し水面に浮いていた。 浮環(ロープ付)を投入したが、ロープが絡まり使用不能となったため、ロープを切断した後、浮環のみを再投入し、一時確保した。 救助者(救命胴衣未装着、自己確保ロープの設定有り)が泳いで救出した。	浮環投入時にロープが絡まり隊員に焦りが生じた。また、要救助者との距離が岸から5mと近かったこと、隊員が自身の泳力を過信していたことにより、ヒヤリハット事案が発生した。
入水	おぼれ	水難救助訓練(河川)中の基本泳法をしている時に流された事例	岸から30m離れた中州へ泳ぐ際、川の流れの速さに対応できず、下流へ流されそうになった。	自分の力量及び、自然の変化の対応を見誤ったため。

入水	おぼれ	冠水道路を歩行中、側溝に転落し溺れそうになった事例	台風による被害状況の確認のため冠水（濁り水）している道路を歩行しているところ、側溝に気付かず転落し溺れそうになった	とび口等で足場の確認をしていなかった。 現場周辺の地理を把握していなかった。
入水	おぼれ	水害により急流の冠水路で流されそうになった事例	消防団がロープにつかまって急流の冠水路を渡っていたため、渡れると思った。	消防団は軽装備（雨具のみ）で急流の負荷がなく渡れたが、重装備（セパレート防火衣装着）で渡ろうとしたため、流されそうになった。
入水	おぼれ	警防隊員が濁流に流されそうになった事例	記録的な集中豪雨により、堤防が決壊し、地域内が広範囲に浸水したため、警戒活動（消防隊が浸水家屋を回り、逃げ遅れ者の検索をしていた。）を実施中、足を滑らせ、道路上を氾濫していた濁流に隊員が流されそうになった。	水の流れが速く、水深もあったが、かろうじて渡れると判断した。 災害が広範囲で続々と転戦命令がきており、隊員が疲労困憊し注意力が欠落していた。
入水	おぼれ	避難誘導時、付近の川が氾濫し溺れそうになった事例	大雨洪水特別警報発令時における住宅床上浸水現場にて避難誘導しようと住宅進入しようとした際、付近の川が氾濫し予想を上回る浸水により溺れそうになった。	現場地理、水深の把握不測。 資器材等で水深を測らず、又水底状況の情報を住居人から聴取しなかった。
入水	おぼれ	大雨洪水警報発令中の国道上で発生した接触事故で乗用車が河川に転落して下流に流された事例	トラックに後部から追突され河川に落下した後、河川を200mほど流され流域の中ほどに止まった乗用車の中に取り残された要救助者2名（老夫婦）を河川の両側にロープを張り救出に向かった際に、急流の中で救助者及び要救助者がかなり多く水を飲んでしまい救出に困難を来した。	救助者の個人装備品（ライフジャケット、山岳用ヘルメット、フローティングロープ等）の不足、安全管理及び救出を容易にさせるために河川の上下流域範囲に隊員を配置させること、ロープの張り方などに問題があり、スムーズな救出が困難でした。
入水	転倒、おぼれ	道路冠水時に用水路に落ちそうになった事例	道路冠水時、用水路のグレーティング及び蓋が水圧により流されてしまい、気づかずに落ちそうになってしまった。	普段は蓋があり歩行できる場所である。そのため安全確認を怠った。さらに泥水であったため、視界が悪かった。
入水	転倒、おぼれ	冠水時にマンホールの蓋が外れていたことによる転倒事例	濁った雨水で冠水した場所に徒歩で向かっていた際、マンホールの蓋が水圧で外れているのに気付かず、マンホールにはまった。	濁った雨水で冠水していたため、マンホールの蓋が外れていたことを目視で認識できなかったため。
入水	転倒、おぼれ	津波による浸水地を検索中、転倒危険があった事例	津波による浸水地（水深約40～100cm）を浮遊物（瓦礫）上に乗って帯状に検索していたところ、バランスが悪く、転倒危険があった。転倒した場合、水面一面に浮遊する様々な瓦礫により受傷危険があり、さらに水深が深い場所においては溺水危険があった。	浸水箇所は濁水で水深の把握が困難であるとともに、足元が不安定で十分な作業姿勢がとれない状況であった。
入水	墜落・転落、おぼれ	夜間帯大雨で冠水した道路から用水路へ転落しそうになった事例	大雨は小康状態で、新たな災害危険を感じる要素が少ない現場であったが、夜間等の視界不良により用水路に転落しそうになった。	活動時間帯が深夜で、周囲に街灯等がない場所であったこと。 道路と用水路の間にはガードレール等がなく、境目が分かりにくかったこと。 隊員間の連携（声かけ）不足のため。 風水害等の災害における経験不足から、活動の際に注意すべき点が不明確だったため。
入水	墜落・転落、おぼれ	道路冠水時、蓋の外れたマンホールへの転倒危険があった事例	東日本大震災による大津波で、道路冠水した地域への検索広報活動中に、視認できない、蓋の外れたマンホールに転倒しそうになった。（ヘルメット、防火衣上下及び消火活動用靴装着）	大津波により冠水道路には多数の瓦礫が散乱しており、十分な安全確認をできないまま冠水道路を進んだため。
入水	墜落・転落、おぼれ	土砂崩れ現場において、隊員が側溝にはまった事例	自宅の裏山が土砂崩れにより崩落し、倒壊した家屋2棟に2名の逃げ遅れがいたとの通報。 到着時、周辺は泥水により冠水しており道路と側溝の区別がつかない状態であった。 隊員が車両を誘導するため先行し、状況を確認しようとしたところ、側溝にはまった。	泥水で冠水していたため、道路と側溝の境界が分からなかった。 周辺の地理に詳しくなかった。 危険を予測し必要な情報収集を怠った。（付近民に誘導を依頼する等）
入水	墜落・転落、おぼれ	水難救助活動中に川の深みに落ち流されそうになった事例	川床の地形変化を予想できなかった。	河川に関する知識不足。 経験不足による事故予見能力不足。

入水	墜落・転落、おぼれ	風水害時の活動で、側溝に足を踏み外し溺れそうになった事例	台風時の深夜床上浸水時、住民の避難救出のため、冠水した道路上をゴムボートをえいし歩いている時、側溝に足を踏み外し「溺れ」そうになり、慌ててゴムボートにしがみつきました。	夜間で水が濁っていたため。
入水	墜落・転落、おぼれ	増水した水路へ転落し流されそうになった事例	水防活動のため現場へ出動した際に、道路沿いの水路に架かった橋を渡ろうとしたところ、増水した水により、水路と橋の境界が分からなく水路に転落し流されそうになった。	増水した水路の橋を渡ろうとした際、橋と水路の境界が不明であったにも関わらず、前を歩いていた隊員が当該橋を渡っていたため、大丈夫だろうと思い込んだこと、周囲の照明が十分ではなかったこともあり、その隊員が通過した側方を渡った結果、水路に転落した。現場における危険要因への認識不足と、思い込み、活動環境の不適による行動が原因である。
入水	墜落・転落、おぼれ	台風接近による強風・豪雨中の人命検索活動時、水路に転落しそうになった事例	日没後、視界不良の人命検索活動時、豪雨による水路（幅約4M）の増水により、水路と農道の境界が分からず水路に転落しそうになった。	現場の状況（地形）確認、危険予知が不足していたため。
入水	墜落・転落、おぼれ	風水害現場で活動中、側溝へ転落しそうになった事例	山手から集まった雨水が集結し、住宅地の一定範囲に床上・床下浸水の被害が発生した事案で、側溝が堆積物により詰まり適切に雨水の処理ができない状態であったため、側溝のグレーチングを一部開け、可搬式消防ポンプにて排水作業を実施していたところ、作業終盤に隊員1名が誤って開けている側溝内に片足を踏み外す事故が発生した。隊員は膝の位置まで流水に浸ってしまったが、道路に手をつき転落を回避、負傷等もなかったものの、水勢や側溝の深さ等の悪条件が重なっていたら重大事故につながっていた可能性もあった。	雨水は山手から土が混ざった状態で流れており、側溝上と他の道路上の区別が全く分らなかったこと。また、それに対し何らかの表示等を行う等の危険排除措置を行っていなかったこと。作業が終盤に差し掛かり、隊員の集中力が欠けていたこと。
入水	墜落・転落、転倒、おぼれ	台風災害による浸水危険区域調査時におけるヒヤリハット事例	浸水危険区域調査時、用水と地面との境目がわからず、用水内へ足を踏み入れそうになったもの。	普段の地面の状況を認識していなかったため。
入水	墜落・転落、転倒、おぼれ	道路が冠水し、泥水によって見えなくなっていた側溝に足を落としそうになった事例	道路脇の用水が大雨により増水し道路が冠水、付近の警戒にあたっていた隊員が泥水によって見えなくなっていた道路端の側溝に落ちそうになった。	泥水により足元が見えなくなっていたにもかかわらず、道路だろうという安易な気持ちで歩いていた。
入水	墜落・転落、転倒、おぼれ	道路が冠水し、泥水によって見えなくなっていた側溝に足を落としそうになった事例	道路脇の用水が大雨により増水し道路が冠水、付近の警戒にあたっていた隊員が泥水によって見えなくなっていた道路端の側溝に落ちそうになった。	泥水により足元が見えなくなっていたにもかかわらず、道路だろうという安易な気持ちで歩いていた。
入水	転倒、激突、おぼれ、腰痛	河川での水難救助対応時、水深を確認せずに入水し負傷しそうになった事例。	現場河川の水深は把握しているが、当日の河川は水が濁っており、要救助者の一部はうすらと視認はできたため、水深を確認せずに入水したところ、水深が浅く負傷していた可能性があった	現場付近に多数の市民がいたため、早期救助を優先し現場確認が不十分だったため。
入水	墜落・転落・転倒・（機器等）巻き込まれ、はさまれ・おぼれ	道路冠水時、マンホールの蓋が持ち上がり、負傷する恐れがあった事例	豪雨で道路等が冠水し、隊員が活動中に突然マンホールの蓋が持ち上がる。職員が蓋に当たることによる負傷する恐れがある。また、蓋の無くなった穴に転落、転倒する恐れがある。	道路等が冠水しており、マンホールの蓋の穴から水が逆流し蓋が持ち上がったのではないかと考える。
入水	墜落・転落、転倒、切り・こすれ、踏み抜き、おぼれ	津波による浸水箇所での負傷危険があった事例	浸水による側溝や用水路への転落危険、及び釘やガラス等による負傷危険があった。	泥水等により足場視界不良。
入水	踏み抜き	捜索活動中、倒壊家屋の釘を踏み抜いた事例	水位40cm程度の冠水した原野を捜索活動中、水面下に沈んでいた釘に気付かず、踏み抜いてしまった。	水面下のため、足元の安全確認ができていなかったこと。
入水	衝突	河川水難救助時、流木に衝突しそうになった事例	河川での水難救助時にブリッジ線を展張し人命検索訓練中、上流から流れてきた流木が接近し衝突しそうになる。	河川の状況悪化により流木の発見が遅れる。安全管理要因の人員不足。

入水	低体温症	冬期の河川における水難救助活動で低体温になり自力で脱出不能になった事例	冬期の河川における水難救助活動で低い水温（6.5℃）内に入水して要救助者を救出後、河川進入時に使用した金属製避難梯子で脱出しようとしたが登はん不能になった。さらに意識は清明であるが全身に力が入らない状態になった。	短時間で要救助者を救出できると判断し、入水時間も短いので大丈夫だろうと思っていた。低体温症に対する認識が甘かった。
潜水	おぼれ、退路の消失、寸断	夜間ゲリラ豪雨に伴い、アンダーパス（地下道）が増水し、車両が取り残された水難救助出場での潜水活動事例	水没車両内の安否確認が出来なかったため、バディで潜行し検索活動中、隊員1名が浮上したが、もう1名がいつになっても浮上してこなかった。その後、地上や水面から呼びかけたが5分くらい浮上してこなく全隊員が不安になった。	夜間で視界が確保できない状況で、水中内での信号（合図）等の確認ができなかった。活動規定（マニュアル）が策定されていなかった。
その他	感電	ゲリラ豪雨による水害現場で、排水作業中、付近に落雷があった事例	水害現場で、天候の回復を待たずに、屋外で排水作業を遂行していたため、付近に落雷があり危険を感じた。	消防隊の使命感によるもの。
その他	感電	ゲリラ豪雨での風水害活動時に自身の直近で落雷が発生した事例	道路冠水下での現場調査中に兆なく自身の直近で落雷が発生し、感電の恐れがあった。	大雨・洪水警報と雷注意報が発令されており、落雷が多々発生しているにもかかわらず注意が不十分であった。
その他	飛来・落下物にぶつかる	水難事故現場で救助ヘリコプターのダウンウォッシュにより飛ばされた救急機材が隊員にあたり負傷した事例	河川水面から要救助者をヘリコプターのホイストワイヤーを吊り上げ、横移動して救急車待機場所に移動したため、道路上に準備したバスケット担架が吹き飛ばされ救急隊員が負傷した。	航空隊との連携活動訓練の回数が少ない為、職員に航空隊との連携活動時の注意事項（ダウンウォッシュに対する知識など）が周知されていなかったため機体の接近に対して対処できなかった。
その他	退路の消失、寸断	集中豪雨による冠水地域で隊が2分され、活動ができなくなった事例	豪雨により冠水した地域での活動において、時間が経つにつれ雨の勢いは増し、退路も冠水し始めている状況であった。自隊は2分され隊長が要救助者と共に家屋内に取り残された。流れが速くボートでも近づくことが不可能。無線機も使用不能になり連絡が取れず、一時的に隊としての活動が出来なくなった。	今まで経験したことがない短時間豪雨で、さまざまな場所で救助要請が入り、職員一人当たりの救助人員が多くなってしまった。
その他	交通事故	消防車両がマンホール穴にはまりこみそうになった事例	ゲリラ豪雨の際、住宅地の床下及び床上浸水が発生し、消防車両で現場に向かう際に道路のマンホール蓋が外れていたため、消防車両がマンホール穴にはまりこみそうになったもの。	注意不足。普段はマンホールの蓋が外れていることなどを考えておらず、普段と同じ走行をしたため。
その他	車両水没	救助活動中、消防車両が浸水しそうになった事例	現場は、急傾斜地崩壊危険箇所面に面した2車線道路で、全長約200m、深さ約1m冠水している状態であった。車両は冠水箇所手前約20mに部署し、救助活動を実施。活動中、冠水道路とは別の急傾斜地から大量の土と水が道路に流れ込み、車両が浸水する危険があった。後着隊が、危険を察知し安全な場所に車両を移動したため、事故には至らなかった。	安全が確認できない場所に車両を駐車して活動した。
その他	車両水没	冠水道路で消防団車両が水没した事例	集中豪雨による冠水道路での巡視警戒活動中、消防団車両が水没した。	悪条件下での走行に対する注意不足及び乗車員全員での安全対策が不十分だった。
その他	爆発・破裂	車両浸水に伴うエアバッグの誤作動による受傷危険事例	機械式立体駐車場の地下に駐車されていた車両が、ゲリラ豪雨により水没していたため、住人により地上まであげられていた。当該車両へ乗込み車内を確認すると、車両ハンドルポスト付近まで浸水し、キーはアクセサリーポジションまで回っていた状態で、エアバッグが誤作動していた。今回は、現場到着時に既にエアバッグが誤作動していたが、冠水後にエアバッグのインフレーター（起爆装置）が、しばらく経ってから作動するケース等も発生しているため、タイミングが違えば車内確認中にエアバッグが誤作動し、受傷していた恐れがあった。	車両が水没するとエアバッグが誤作動するという認識が不足していたこと。